

ハンスリック『音楽美について』の二重の意義

—音楽美学の確立と音楽学の基礎づけ

小川将也 (慶應義塾大学)

本発表は、エドゥアルト・ハンスリック (Eduard Hanslick, 1825~1904) による『音楽美について Vom Musikalisch-Schönen』(初版 1854 年、以下『音楽美論』) を対象として、その十度にわたる改訂過程と 19 世紀後半のドイツ語圏における影響に注目しながら、以下の 3 点について検証する。第一に『音楽美論』は形而上学・観念論から自然科学・実証主義へという 19 世紀の学問の推移を反映する過渡的な書物であること、第二に『音楽美論』は形式主義的音楽美学の確立を示すとともに、実証主義的音楽学の方法を提示しそれを基礎づけた書であること、第三に『音楽美論』以後の音楽学が純粋に自然科学的な客観性や普遍性を追求したというよりも、ハンスリックが提示した近代的な音楽観の影響下にある実証主義であったこと、の 3 点である。

以上の 3 点を検証するために、発表者は、先行研究において明確に主題化されてこなかったハンスリック以後の近代的な音楽美学と実証的な音楽学とを対比しつつ、19 世紀後半において音楽美学とはいかなる学問であったのか、19 世紀末の近代的な音楽学の成立に対して音楽美学はどのような影響を与えたのか、そして、実証的な近代音楽学の成立以後に両者の関係はどのように変化したのか、を考察する。その際、主たる資料として、初版から著者生前の最後の版となった第 10 版 (1902 年) までの異同を記した D.シュトラウスによる『音楽美論』歴史的批判版とアドラーの論文「音楽学の範囲、方法、目的 Umfang, Methode und Ziel der Musikwissenschaft」(1885 年) を読解の対象とする。

本発表では、まず『音楽美論』の改訂の過程をたどりながら、すでに先行研究で指摘されているツィンマーマンとの関係、ヘーゲル美学に類似する観念論的記述、ヘルムホルツからの影響を確認する。次に、このような改訂過程を踏まえて、ハンスリックにおける形式主義の確立と自然科学的な方法をテキストに即して検証する。最後に、フーゴー・リーマンおよびグイド・アドラーにおける音楽学の目的と方法について、『音楽美論』との異同を確認し、ハンスリックにおける音楽の「自立 *selbstständig*」化 (彼は自律 *autonom* の語を用いない) が、近代音楽学が掲げた実証主義を支える基礎となったことを実証する。このように、芸術の本質を美と見なす近代的なパラダイムに基づくハンスリックの『音楽美論』は、音楽を哲学的に基礎づける原理学としての音楽美学であると同時に、音楽作品を自然科学的に考察する事実学としての方法を音楽研究に要求する。つまり、『音楽美論』は、観念論的音楽美学から形式主義的音楽美学への転換点であると同時に、古代以来の思弁的な音楽研究から近代の実証的な音楽学への転換点でもあった。